

みどりを守り、創り、育む

文・漆原次郎

井手 久登

いで ひさと

1936年（昭和11年）9月9日生まれ。街などにあるみどり豊かな場所を、守り、創り、育むための方法を研究してきた。とくに、街づくりや農村づくりにおいて、自然をなるべく生かして土地を使うにはどうしたらよいかを研究し、「植生図」を使って土地の利用を計画する方法を生み出した。



みどりは人にさまざまな恵みをもたらす。でも、街なかにある公園などのみどり豊かな場所は、人がなにもしないで保たれているというわけではない。井手さんは、みどりのある街づくりをするためには、最初からみどり豊かな場所をとっておくことが大切であると考えてきた。では、そうした街づくりをするには、どのようなことが必要になるだろうか。

「ちょっと変わった研究室」に入る

井手さんは東京都の王子^{おうじ}というところで生まれた。小学生時代は、戦争でけがをした父が病院を移ったのに付いていったこともあり、学校が8回も変わった。佐賀県や長崎県に移ったときは、まわりの子たちの方言がわからず苦労したという。「外国に行ったような気分でした。でも、地域ごとに文化、歴史、自然があるのだと感じることもできました。地域ごとにちがう個性を大事にしないといけないという気持ちをなんとなくもつようになっていました」。

8校目の、卒業した小学校は東京都八王子市^{はちおうじ}にあった。その後、大学2年まで八王子で暮らすことになる。井手さんの母は庭いじりがとても好きで、近くの山から木などをとってきて庭に植えたり、庭石を動かしたりした。井手さんも母の庭いじりをよく手伝った。「どの木を植えると育ちやすいかとか、どの木に虫がつきやすいとかをいつの間にか覚えました。そのころ身に付けたことは忘れないものです。将来みどりに関わる仕事をするとは、当時は思いもしませんでした」。

井手さんは東京大学に進んだ。2年生のとき、どの研究分野に進むか考えていたところ、生物学の授業で佐藤重平^{じゅうへい}先生が「農学部には、庭園^{ていえん}や花を研究する、ちょっと変わった研究室があ

る」と紹介してくれた。また、担任の山川振作先生は「あまり学生の行かないところでも10年、研究をがんばれば食べていけるようになる。自分もそうだった」と話してくれた。井手さんは、庭園や花を研究する農学部園芸学第二研究室で学ぶことにした。

自然を生かした土地の使いかたを地図で示す

園芸とは、果物、野菜、草花など植えて育てたり、庭や庭木を扱うことをいう。園芸のなかでも、果物や野菜や販売用の花などを扱うものは生産園芸とよばれ、農業に重要なものと考えられていた。「でも、私の研究室は観賞園芸を対象としていて、当時の農学部のなかでは変わりものと考えられていました」。

井手さんが入った研究室では、庭づくりや花の研究から始まり、公園や緑地づくり、さらに街づくりなどの研究に進もうとする人が増えてきた。しかし、当時はまだ公園、緑地、街などをどうつくればよいかを筋道だてて説明する方法がなく、外国の例を参考にしていた。

また、実際の街づくりや農村づくりの考えかたにおいても、自然の環境を大切に守っていかうとする考えはあまりなかった。みどりよりも、産業を発展させるため工場地帯や住宅、田畑をつくるべきだという考えが強かったのだ。

「昭和の高度成長時代、街からみどりがどんどん減っていきました。さまざまな分野の人にみどりの大切さを感じてもらえる方法を、どうにかつくりたいと思いました」

建てものや道路などがつくられてしまうと、そこに公園を新しくつくることはおずかしくなる。だから、街づくりの計画を立てる始めのときから、みどりを取り入れて保つことを考えておかなければならない。では、その方法をどのようにつくればよいだろうか。

井手さんは「研究の方法として、生態学を基礎とすることにしました」と言う。生態学というのは、生きものと、まわりの環境の関わり合いを研究する学問のことだ。生態学のなかでも井手さんは、ドイツを中心に発展してきた植物社会学という分野の方法に注目した。「どの場所にどんな植物の集まり(植生という)があるか調べた結果を地図で表すのです。これを植生図といいます。いろいろな人が街づくりに関わる時、まず、地図がないと計画を話し合うことができないと考えました」。

植物生態学がさかんなドイツでは、研究者は植生図をつくるだけでなく、植生図をもとにしてその植物たちを支える土壌の種類を示した地図や、その土地でどのような作物や樹木を育てるのが適しているかを示した地図などもつくっていた。井手さんは、街づくりの計画では、そうしたいくつかの種類を地図をつくるのが大切と考えるようになった。「いろいろな地図をつくれれば、こんな植物の集まる場所では、こんな土壌があるから、田畑にするときはこんな作物を育てるとよい、緑地にするならこんな木を植えるとよい、といったことを考えることができるようになります。街づくりをする人にもわかってもらいやすくなります」。



秋田県の八郎瀧干拓地をのぞむ寒風山にて横山先生(右)と。

井手さんが植物社会学のことを知ったのは、大学の研究室の横山光雄先生から「植物社会学を勉強するように」と言われていたからでもあった。しかし、日本でこの研究をしていた人は少なかった。横山先生のさらに先生にあたる北村徳太郎先生も植物社会学の大切さを1930年代から言っていたが、具体的な調査の方法などはわかっていなかった。そこで、井手さんは、植物社会学の数少ない研究者だった横浜国立大学の宮脇昭先生をたずねて、調査のしかたや地図のつく

りかたなどを聞いていくことにした。1965年(昭和40年)からは、宮脇先生たちと、実際の日本の土地で、どんな場所にどんな植物が生きているかを調べて地図をつくっていった。訪れたのは、研究学園都市の計画が立てられていた茨城県の筑波や、東京都の多摩ニュータウンなどだ。

さらに井手さんは、茨城県玉里村(いまの小美玉市)などで計画されていた農村の土地再整備で、「自然立地的土地利用計画図」をつくり、農村づくりに役立ててもらったようにした。これは、場所ごとの植生、土壌、そして地形の三つの情報をまとめ、それと土地利用との関係を示した地図だ。その土地の自然を生かすために、どの場所に畑を、水田を、公園を、道路を、また人の住む場所を置くのがよいのかを示している。「これを農村づくりの話し合の材料にしてもらいました。この計画図によって早い段階から緑地を保つことができるようになったと思います」



茨城県旧玉里村の農村再整備計画に提案された自然立地的土地利用計画図。

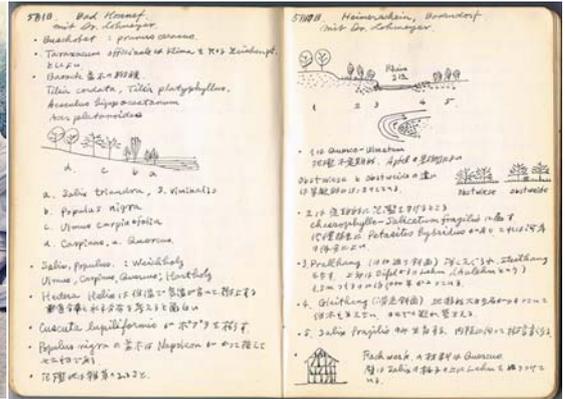
研究の本場、ドイツへ留学

こうして自然を生かした街づくりの方法を研究していたところ、井手さんは植物社会学の研究がさかんな西ドイツ(いまのドイツ)に留学をした。1968(昭和43)年、首都だったボン市にある植生学・自然保護・景域保全研究所を訪れ、1年間ここで研究した。そして、さまざまな研究者と会い、教

えを受けた。たとえば、井手さんは植物社会学のリーダーだった R・テュクセン教授に会いにいった。テュクセン教授は、もし人がいる影響がまったくなかったとしたら、いまその場所にどんな植生が見られるかという大切な考えかたを生みだした研究者だ。土壌と植物の生きかたの関係について話を聞いたり、天然の森を案内してもらったりした。



(左) 留学先の研究所。2階左端の部屋に井手さんは滞在した。(中) テクセン教授。(右) ローマイヤー博士の話を聞き書き。



また、毎週日曜日になると、研究所の W・ローマイヤー博士がやっている野外調査に連れて行ってもらい、行った場所でドイツの自然、土地の使いかた、文化などについての話聞いた。「あるときは、豚を飼っている農家のところにやってきました。するとローマイヤー先生は、ここはドングリの実がなるミズナラの生えやすい場所のはずだと言うのです。豚はドング리를餌とするため、ドングリのなる木があったところで豚を飼いはじめたというわけです」。

その土地の自然と生活、文化、芸術は深くつながっている。井手さんは、ローマイヤー博士たちの話をていねいにノートに記していった。「このノートはその後の土地利用や地域計画を考えるうえでどれほど役に立ったか計り知れません」。

自然の側からものを見ていた昔の人びと

日本での実際の街づくりにおける研究と、ドイツとの留学を経た井手さんは、自然をできるかぎり生かした土地の使いかたを地図で表すという方法を完成させていった。この方法により、街づくりの計画のときから緑地にすべき場所を示しておけるようになった。さらに、その土地で育てるのにふさわしい樹木や農作物がなにかであるかを示したり、災害に強い家並みを考えたりしやすくなり、街づくりや農村づくりの方法は進歩した。井手さんの生み出した方法が広まり、街のなかのみどりを大切に保ち、創り、育もうという人びとの意識もより強くなった。

井手さんは、江戸時代に書かれた農書とよばれる、農業についての本を多く読んできた。そこには、かつての日本人の、いまとはちがう土地の使いかたが書かれてあるという。

「昔の日本人は、人間の側から土地を見るだけでなく、自然の側からも土地の使いかたを考えていたのです。こんな土壌ならば、ここは畑に使う、ここは人が住むところに使う、といった具合にです。しかし、江戸時代のなかばから考えかたが変わっていき、いまの人びとは、人間の側から見た土地の使いかたしかりなくなっていました。自分たちのために土地を変えていこうとする考えをしていることが、いま言われている環境問題の根本にあるのだと思っています」

そこにある自然を、長く活かせるように使っていく。そのような土地の使いかたは長い目でみれば結局は私たち人間のためにもなるはずだ。自然を生かした土地の使いかたを長く考えてきた井手さんは、そのような思いをもっている。